

第二回

望月朴濤の巻

平成二十六年十月三十一日(金)
午後六時開演
日本橋劇場(日本橋公会堂)

い 挨拶

晩秋の候、ますます御健勝のこととお慶び申し上げます。

この度、昨年に引き続き第二回「望月朴清の会」を開催する運びとなりました。

昨年の演目は打楽器を中心とした楽曲でしたが、今年は義太夫・長唄・箏の演奏を加え、より重層的な邦楽の世界をお楽しみいただきたいと思っております。

囃子が主となる会を二年も続けて出来ることは、本当に幸せな事と感じております。いつも思う事ではありますが、音楽は一人ではできない、皆さんのご協力があって初めて一つの舞台が出来るという事です。

バラエティーに富んだ邦楽の演奏をお楽しみいただくと共に、囃子の新しい魅力を感じ取っていただければ幸いです。

また今回の会にご出演いただきました賛助出演の皆様、またスタッフの皆様、この会に足をお運びになつてくださいました皆様に、この場をかりて厚く御礼を申し上げます。

壽式三番叟

| | | | | | |
|-----|----|-----|----|----|------|
| | 竹本 | 翔太夫 | 笛 | 藤舎 | 貴生 |
| | 竹本 | 六太夫 | 胴脇 | 望月 | 秀幸 |
| | 竹本 | 蔡太夫 | 頭取 | 望月 | 左武郎 |
| 浄瑠璃 | 豊澤 | 長一郎 | 胴先 | 望月 | 左喜三郎 |
| 三味線 | 鶴澤 | 祐二 | 大鼓 | 望月 | 朴清 |
| | 鶴澤 | 翔也 | 太鼓 | 望月 | 左之助 |

義太夫「壽式三番叟」曲目解説

義太夫の壽式三番叟は、劇場開場式の祝儀曲のみならず、文楽・歌舞伎・舞踊会の公演でよく上演されている。

翁・千歳のくだりを略した「二人三番叟」が多いが、今回はほとんど省略無しの素浄瑠璃で演奏される。

座付笛に続くソナエと称する弾き出しは三筋の開放弦に天地人を象り、翁は天照大神、千歳は武士、三番叟は農民、という位取りで演奏するのが心得。

謡曲の風格を取り入れた「とうとうたらり」のくだりは、厳肅に演奏されるが、翁は陰気にならぬよう、「作物がよく稔っているのを神様がよるこんでいらっしやる」という性格で演奏するという口伝がある。

翁還しの後、採み出しとなって、「おおさえおおさえ」と三番叟が活躍する採みの段。二上がりのメリヤス。問答があり、「そなたこそ」で鈴の段。

軽快な「チリンチチン」のメリヤス。折頭より三番オロシ・段切れで幕となる。囃子の拍子や手組みをきちんと把握する事も重要で、竹本連中としては大曲である。

(解説 歌舞伎義太夫・太夫 竹本蔡太夫)

「壽式三番叟」は竹本蔡太夫師の浄瑠璃と、太棹三味線の豪快な響きに乗せて、原型となった能楽の三番叟の息と息のぶつかり合いをご堪能ください。

伊達政宗

作詞 三枝彦雄
作曲 三世杵屋宗蔵
作調 九世望月太左衛門

| | | | |
|---------|------|---------|---|
| 杵屋 喜太郎 | 笙 | 山崎 扇 | 秋 |
| 杵屋 巳之助 | 箏 | 鳳聲 晴 | 之 |
| 松永 忠次郎 | 笛 | 望月 太津之 | |
| 唄 杵屋 直吉 | 小鼓 | 望月 朴 | 清 |
| 芳村 伊十一郎 | 小鼓 | 望月 大意之助 | |
| 杵屋 栄四郎 | 大鼓 | 望月 左喜三郎 | |
| 松永 忠一郎 | 太鼓 | | |
| 芳村 伊十治郎 | 望月 秀 | 幸 | |

蔭囃子

長唄「伊達政宗」曲目解説

内容は豊臣時代、奥州にあって秀吉の一大脅威であった英傑伊達政宗、独眼竜政宗を主人公に、陸奥の春夏秋冬の風物を織り込み、彼の文武両道に励めという思想を盛り込んだ。

「黄金花咲く陸奥の、奥の細道分け入れば……」松尾芭蕉の「奥の細道」の一節から唄いだし、「頃は寛永初めつかた……」から日本三景松島の絶景を情緒的に唄う。

「それ文武は……」から文武両道の修練と、忠孝に励めの主題となる。
実はここに作者の狙いがある。

「遠かりし花の梢も匂ふなり……」は、太閤秀吉が芳野で催した花見の宴で、政宗が詠んだ歌。

勇壮な武者の流鏑馬などが出て、「あれ山の端に月のぞく……」から一転クドキとなる。ついで彼の地の代表民謡「さんさ時雨」が入って「文武の道は……」で結言となる。

(解説 石川譚月「九世芳村伊四郎全集」より抜粋)

「伊達政宗」は私がまだ十代の頃、初めてこの曲のテープを聴いた時、小鼓は九世望月太左衛門でした。

その時の感動を思い出しながら演奏させていただきました。

望月 朴 清

古事神鳴 第二章

構成・作調 望月朴清
作曲 藤舎貴生
照明 北寄崎 嵩

朗読 金子 あ い

望月 朴 清

笛 藤 舎 貴 生

望月 左之助

笛 望月 美沙輔

唄 杵屋 喜太郎

望月 太津之

三味線 芳村 伊十治郎

望月 秀 幸

箏 山崎 扇 秋

創作曲「古事神鳴」曲目解説

創作曲「古事神鳴」は、古事記の世界に題材を取った、わたくし望月朴清のライフワークとする作品です。数々の雛子の楽器による演奏で「古事記」の世界を表現しようと取り組みました。

「国造りから天岩戸」をテーマにした昨年第一章に引き続き、今回は「八岐大蛇と因幡の白兔伝説」を中心とした第二章をお届けします。

前回は雛子のみでしたが、今回は藤舎貴生さんに作曲を頼んで、箏、唄、三味線の方達にもご出演いただき楽しい作品となっております。

賛 助 出 演

義太夫

淨瑠璃

竹本 葵太夫

竹本 六太夫

竹本 翔太夫

三味線

豊澤 長一郎

鶴澤 祐二

鶴澤 翔也

朗読

金子 あい

箏

山崎 扇秋

長唄

唄

杵屋 直吉

松永 忠次郎

杵屋 巳之助

杵屋 喜太郎

三味線

芳村 伊十一郎

杵屋 栄四郎

松永 忠一郎

芳村 伊十治郎

雛子

望月 左武郎

望月 左喜三郎

望月 左之助

望月 太意之助

望月 太津之

望月 秀幸

望月 美沙輔

鳳聲 晴之

藤舎 貴生

スタッフ

照 明 北寄崎 嵩

音 響 松平 二郎

題字・めぐり 中嶋 玉華

デザイン サザンカンパニー

ビデオ インクス市谷雅裕

写 真 土居 政則

印刷 有限会社ダイコオー企画

事務 梅澤 良行

舞台監督 増田 一雄

主 催

五代目

望月朴清

〒一〇一〇〇〇三

東京都台東区根岸五十一―十
電話〇三―六三二―九七四四